

# 村上貞夫

旧名

谷本貞夫

むらかみ・さだお

たにもと・さだお

医師、福山医師会長、福山回生病院理事長

## 経歴

生:大正13年ごろ

没:平成24年(2012年)2月、享年88歳

昭和17年(1942年)	18歳ごろ	広島県立福山誠之館中学校卒業
昭和30年(1955年)4月～	31歳ごろ～	福山回生病院理事長
昭和61年(1986年)4月～ 平成2年(1990年)3月	62～ 66歳ごろ	福山市医師会会長(第9代)
昭和61年(1986年)4月～ 平成4年(1992年)3月	62～ 68歳ごろ	日本医師会代議員
昭和63年(1988年)4月～ 平成4年(1992年)3月	64～ 68歳ごろ	広島県医師会副会長
昭和53年(1978年)7月	54歳ごろ	福山ロータリークラブ会長
平成5年(1993年)	69歳ごろ	勲五等双光旭日章
平成13年(2001年)	77歳ごろ	岡山医学同窓会福山支部(会員319名)支部長

## 村上貞夫先生

岩崎博(昭和19年卒)

福山回生病院理事長、内科医。

第9代福山市医師会長。在職中、昭和63年に新医師会館を現在地三吉町に建設、看護専門学校、医師会検査センター、市と連動する地域医療支援組織などを含む新医師会館を建設し、今日の医師会活動の基盤を作った。又福山市における公私病院を組織化して、はじめて休日救急医療体制を立ち上げた。昭和63年から平成4年、広島県医師会副会長。医師会長時代に以下のような諸行事が盛大に持たれた。

- (1) 当時藩校誠之館の流れをくむ明治福山病院・同仁館病院、医学校が明治2年開設後百二十年を迎えるに際し、地元医師会長としてこれを顕彰すべく、福山駅前旧跡における記念碑の建碑
- (2) 福山市、誠之館、医師会関係者による記念碑の除幕式

「福山医学黎明の地」記念碑除幕式



左より 福山市医師会 宮崎泰一理事

右より 福山誠之館同窓会 猪原修三会長

左より2番目 福山誠之館同窓会 石井淳副会長

右より2番目 福山市医師会 村上貞夫会長

左より3番目 福山市医師会 岩崎博副会長

右より3番目 福山誠之館同窓会 小林政夫副会長

- (3) 会長司会による森田雅一(誠之館百三十年史執筆者)と平川一義先生(平川鴨里の孫)との対談、およびその記念ビデオの製作

- (4) ふくやま美術館における医師会の記念芸術展

## 「平和を願って」

村上貞夫(昭和17年卒)

8月15日、それはめぐり来て30年、今でも言いようのないいやな気持ちが思い出される。

あの日あの時、私は正直言って玉音放送は半分も聞きとれなかった。

それでも何となく戦いが終わったことがわかった。

それと同時に今迄張りつめていた絆が毒に切れてただ茫然、そして無念の涙が出ようとして出切らず、いつの間にか腰の軍刀を抜いて妄の波紋を眺めていた。

同僚たちも思いおもいに周囲に散らばって黙然と声もなく思いにふけていた。

どこかでおえつのしゃっくり声が伝わると、せきを切ったようにここかしこで男泣きのしぼり上げをむせび泣きの輪が広がって行った。

陸軍軍医学校見習士官隊最後の衛生作戦第2日の正午のことである。

総ては終わった。

身も心も国難にささげんと頑張ってきた今迄は、この一瞬にして総てが終わった。  
過去を思い、そしてこれから先の苦難忍渋の日々を脈絡もなく考えていると、苦しい戦の中で後に続くものを信じて散って行った多くの若人のことがとめどもなく脳裡をよぎる。  
そして生き残ったことが罪悪のように思えて来て仕方がなかった。  
戦争とはまことにみじめである。  
何故に戦争をするのであろうと考えたことも幾度があった。  
然し今は戦争の最中である。  
どんなことがあっても負けてはならない。  
敗者のみじめさは一人であるから、少しでも明るい局面で終戦を迎えねばならないと、唯一途に努力した若い日々を今でも私は少しも悔いてはいない。  
それがたとえ無意味なものであっても、むしろ当時ではどうせんすべきことであつたと考えている。  
わが家の大火の最中に出火原因を論じたり、手を拱いて傍観する家族があつてよいものであろうかと考えていた。

戦い終わって火事場どろぼう的な人間が要領よく立ち廻つたことはなかつたであろうか。  
家を、財産を、親を、子を、夫を、そして命までささげた人達をぼうとくすることがなかつただろうか。  
私は戦争のみじめさおろかさを身を以って知っているが故に、戦争をこの上なくにくむ。  
そしてそれにもまして、戦争を食いものにするものを一層にくむ。  
私は学友を幾人か広島、長崎の原爆で失つた。  
それはほんとうに惜しい友ばかりである。

戦没学生の手記が戦後いたましい思いをこめて数多く刊行された中で、恐らくその第1号かと考えられる「岬柴火遺稿集」は、ささやかな和紙の文集であるが、被爆一周年の昭和21年8月に発刊されていた。  
それは同級生目崎一三君(広高より京大哲学科に入学、応召広島で被爆死)を偲んで、河合正美君(広高より京大卒、現中国電力福山営業所長)の血のにじむ努力によってなされたものであつた。  
偶然にも彼の死後30年目に福山市立図書館から著者河合君によって発見され感慨新であつたが、これを読み進んでいる中に私はふと広島原爆慰霊碑のことを思い出した。

かつてこの碑文がいろいろ物議をかもしたことは聞いていたが、詳しいことは知らない。  
改めて思い出してみると主語はともかくとしても、「過ち」という言葉が気になって来る。  
「過ち」とは一体何なのだろうか。  
原爆が過ちで落とされたのだろうか。  
戦争が過ちで起こつたのだろうか。  
過ちで政治がなされていたのだろうか。  
過ちとは何を意味するのだろうか。  
われわれが平素使う「あやまち」という言葉には誤算とかくるとか過失とか、かなり不可抗力的なにおいが強いはず。  
果して誤算や過失としてこの戦争をとらえてよいものであろうか。

過ちがあやまちであるならば、あやまちを繰返さないとな誰が保証出来るのだろう。  
文学的に高い次元の意味あいを含めて表現される言葉であると知りながら、作者の気持をくみながら、日本人的な心のあまさがのぞいているようで、やはり一抹の不安を感じずにはおれない。

戦後30年、近世日本の中で最も長い平和の時代がやって来たが、平和の豊さののろいか、世の中は前にも増して人の心がすさんでみえる。  
民主主義の名の下に自分勝手な言動が横行し、戦争をなくそうといって戦う集団が出来上がる。  
平和は自らの手でつかみとるものだと静かでありたい。  
人の心をかき乱す、全く人の立場を無視した世相となってしまった。  
平和とは一体君にとって何なのかと問いたくなる時さえある。

こうした独善の思想が過去の戦争を引き起こしたものにつながっていなければ幸いである。  
ただ時代の風潮というものは、何時の間にか恐ろしい力となって人の心押し流すものであることを記憶しておく必要がある。  
と思うと同時に、理想と現実との間の多くの問題を飛び越えては、本当の平和は望み難いであろうと思うのである。 (出典1)

誠之館所蔵品				
管理No.	氏名	名称	制作/発行	日付
02060	村上貞夫 著 福山誠之館同窓会 編	「大海令」、『懐古－誠之館時代の思い出』、179頁	福山誠之館同窓会	昭和58年
03364	福山市医師会 編	記念ビデオ「医学黎明の時代」	福山市医師会	平成元年
04586	福山市医師会 編	『福山医師会会報(89号)』、「明治福山医学校・同仁館病院病院」	福山市医師会	平成元年

出典1:『傷痕』、広島県医師会編刊、昭和51年

関連資料1:『懐古－誠之館時代の思い出』、179頁、「大海令」、村上貞夫、福山誠之館同窓会編刊、昭和58年5月15日

2005年4月14日更新:本文●2006年4月28日更新:タイトル・本文・所蔵品・出典●2006年6月29日更新:レイアウト●2007年6月22日更新:本文・関連情報●2007年8月23日更新:関係資料●2008年8月13日更新:経歴・本文●2011年8月18日更新:誠之館所蔵品●2011年8月24日更新:本文●2012年4月2日更新:経歴●2015年12月